比企の畑から

畑の経済学

小宮山　洋夫

畑が広くなったこともあって、昨年から作物を育てる場所（ウネ）と歩く通路を、固定することにした。

ウネの幅は約一メートル二十センチ、大きく身体を広げるナス、ブロッコリー、サトイモなどは、一本のウネに一列、トマト、キャベツ、ネギ、ジャガイモ、ダイコン、サヤエンドウなどは二列、サツマイモは一、二列に植えつける。蔓を地に這わせるカボチャ、キュウリは、ウネを二、三本使う。

ウネには、野菜くず、刈り草、落ち葉などを心掛けて施す。通路しか歩かないことと相まって、ウネは、年中やわらかい。それで、畑はあらためて耕さなくともすむようになった。ウネの土をクワを使い、右へ左へ動かすだけで、大半の作業は完結する。

結果的に、耕作の手間をかなり節約することになった。もちろん畑では、耕作そのものも楽しみの一つなのだが、過剰になると、快が後退して苦痛がはじまる。浮いた時間は、畦道に腰をおろし、畑や林、山並み、空などを眺め、あれこれと夢想して費やす。

ウネと通路の固定は、「最小労力の最大効果」という経済原則を、実現するものだった。無意識のうちに。

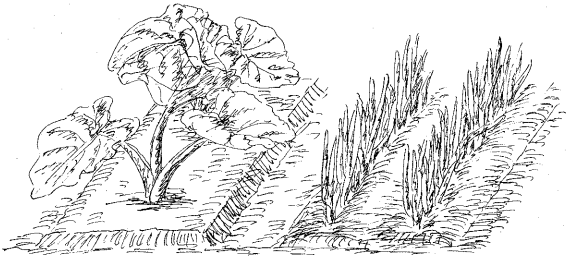
野菜づくりは、手をかければかけるほど、よい成果が得られるという思い込みがある。しかし、そんなことはない。もともと植物は自分自身で育つ力を持っている。

至福な「自然」に感謝しよう。彼女は、必要なものを容易に獲得しうるものとし、獲得しにくいものを不必要なものとしたがゆえに。

（エピクロス『教説と断片』岩波文庫）

適切な世話さえ欠かさなければ、労力を省く経済原則の適用は、収穫物の有用性を何らマイナスするものではない。

秋はなんといっても、サツマイモ堀りが楽しい。一昨年、夏とくに高温だったこともあって、イモの虫食いがはげしかった。ただし、虫食いは表皮にとどまっているから、食べる上に、気になる



サトイモとネギ

ほどの被害ではない。

H氏は嘆息していった。

「こんなきたない虫食いのイモは、恥ずかしくて人にあげられない」

ぼくは応えた。

「いいではないですか。美味しければ」

ぼくはむしろ店頭に並べられたサツマイモの表皮の美しさに、疑念を抱きはじめていた。

H氏は昨年、虫害を防ごうと、イモを植えつけるウネに、消石灰を大量に施した。ある園芸店からすすめられたからだ。その結果は、散々だった。ツルは伸びない、少量しか採れない。イモは変質してまったく食べ物にならなかった。

食べ物である野菜の有用性（使用価値）は、健康によいということにつきる。しかし、他の商品とちがって、眺めても、触っても、さらに味わっても分からない。その意味では野菜は（農産物一般に通じるのだが）、特異な生産物といえよう。そこで市場においては、買い手は暗黙のうちに、大きさ、外観で判断、よしとして求めることになる。

商品野菜のつくり手は、これに呼応するように、化学肥料、ビニール、農薬の利用など、外観を第一目的とする生産方法を押し進めていく。自分で消費する対象でないから、商品なのだ。商品は自分のための有用物でなく、他人のための使用価値なのである。

商品生産においては、商品の貨幣への転化は、まさに「命がけの跳躍」なのだ。売れなければ、

ハクサイ

生産を続けられなくなる。また、売れたとしても、望んでいる価格を実現できるとは限らない。外観で買われるとすれば、中身はどうしても後退していく。

自給を目的とする家庭菜園では、小さくとも、形が悪くとも、自分なりのものが育てばよいはずだ。問題は有用性だから。そして、それにふさわしい育て方が、自然に決まってくる。

にもかかわらず、どこかで比較している。何と？　農家の畑や店頭の野菜、つまり商品としての野菜と。そして漠然とした目標になってしまっている。人にりっぱと認められ、ほめられたい気持ちもないではない。

キャベツ

そこから、自家消費のための栽培であるにもかかわらず、商品生産の方法に、誘惑を覚えることが時折ある。そして肝の座っていない自分を腹だたしく思う。「貨幣に転化される野菜」に幻惑されるとは。

メヒシバ、オヒシバ、エノコログサ、アカザなど、猛々しい夏の雑草が姿を消す秋は、おだやかな心地で、畑仕事ができるのがうれしい。トマト、ピーマン、トウモロコシなど、背の高い夏野菜から、ダイコン、ニンジン、キャベツ、ブロッコリー、ハクサイ、コマツナなど根物、葉物野菜に入れ替わると、畑は落ちついた風景に移っていく。

（家庭菜園研究家）